

[第1回]

ジャパン・プロブレム

「さあ、おもしろい話をしましょう。せっかく養老先生だから」……

足早に颯爽と登場したゲストは、養老孟司氏とは東京大学医学部で同期だったという黒川清氏である。

内科医として、教育者として、また時の論客として、その活躍は縦横無尽。

忌憚のないトークから、日本の課題がみえている。

「歴史を勉強しよう」

黒川 日本はいま元気がないと言うけれども、実を言うと、1990年代にバブルがはじけたのは、日本だけでなく世界中の現象です。しかし、それから12年も経っているのに日本は低迷したまま、全然うまくいっていない。何が問題か。私なりに考えたことを話しますから、ご意見を伺いたいですよ。

養老 いえ、好きにしゃべってくれていいですよ(笑)。

黒川 現在は過去の延長上にあるということは、いちおうみんな認識していますね。けれども日本の最近のリーダーがどういう人たちかと考えると、1つは、彼らが本当に頑張ってこれまでの成功物語をつくり上げたわけではない、といえることです。血のにじむようなデシジョン、決断をしたことがない。なぜかという、大きな歴史のうねりに対する洞察力に欠

けているから、うねりの中の小波にしか反応していないのですね。その原因の1つは、近代日本の歴史を勉強していないこと。隣国とのかかわりや、現在に至る歴史の流れを知らないでいる。そしてグローバル化と言いつつ、グローバル化がなんなのかを知らないことです。リーダーというと、大概是エリートで外国に行っていた人も多いけれども、商社員であれ、銀行員、役人、大学の先生、医者であれ、あくまでも日本の人事体系の枠組みのなかで行っているから、本当の意味で広い世界をみているとはいえないのです。それなのに「アメリカでは」というような発言が多いから、私はいろいろな委員会や何かによばれると、なるべく引き受けますよ。エライ先生たちの知ったかぶり発言が、日本を悪くするといけなからね。

養老 それであちこち忙しい。

黒川 そうそう(笑)。かつて「ジャパン・

アズ・ナンバーワン」と言われていい気になってきたころ、日本は「政産官の鉄のトライアングル」だった。私はそのなかに「学」が入っていない日本はオカシナ社会だと言っていたら、最近になって「産学官連携」と叫ばれている。それもおかしいけど、なぜそうなったのかというと、やはり1つには、今のリーダーたちの歴史観の欠如がありますね。みな大学入試までが勝負で来て、大学ではほとんど勉強していないのです。いったん、より良いポジションへのチケットを手に入れてしまうと、卒業後は大企業か官僚になるかで、あとは終身雇用です。出世するために三角形を登っていくだけ、常に上しかみていない。そういう人を「ヒラメ人間」と言う(笑)。それが社長になると、途端に何をしてよいかわからない。今の銀行などがみっともないことになっているのは、ヒラメ人間の「上がり」が日本を支配しているからでしょう。だから

黒川 清

1936年、東京生まれ。東京大学大学院博士課程修了。ペンシルバニア大学医学部生化学助手、カリフォルニア大学ロサンゼルス校医学部内科助教授、準教授を経て、1979年同教授。1983年東京大学医学部第四内科助教授として日本に帰国。米国の医学教育を熟知し、外へ開かれた医学教育を実践。1989年東京大学医学部第一内科教授。その後、東大を退官前に辞し、1996年東海大学教授、医学部長になる。1997年に東京大学名誉教授。2002年から現職。著書は『医学生のお勉強』、『医を語る』など多数。

ゲスト

黒川 清 *Kurokawa Kiyoshi*

東海大学教授・東海大学総合医学研究所長



養老先生のように、東大を定年まで3年も残して辞めたなんて、みんな「バカじゃねえか」(笑)と思っている。私も辞めてしまったから、「あんたらのクラスはノンキでけっこう」と言われるのです。

養老 それはね、年代があるのですよ。考えてみると、昭和12年(1937)はちょっと歴史的にも変わった年ですよ。子どもが少なかった。当時の人口表をみると12年だけピョコンと凹んでいるのです。中国で戦争が始まってしまって、僕らは小学2年生で終戦になるまで、結局ずっと戦争です。当時の新聞を読むとおもしろい。裏表の2面しかなく、載っている記事のすべてが中国戦線です。ということは、ジャーナリズム自体がどう機能しているかが極めてよくわかる。紙面全部を戦争で埋めてしまえば、戦争が重要だということは暗黙のうちに伝わります。これを軍国主義という。その日、首をくった人も、泥棒に入った奴もいるだろ

うけれど、僕が読んだかぎり、いっさい書いていない。おそらく、今の新聞も同じ体質をもっているのではないかと。1面に政治、次が外交。順序づけ、フレームができていて、それを動かすのは容易なことではない。要するに日本では「形」が大事なのです。形を動かしたがいらない。教育の枠組みにしてもそうですね。いったん決めてある枠組みをいじろうとすると必ず怒られる。「そう決まっていますから」と。結局、楽をしたいのです。この楽な仕事のツケが回ってきていますね。

グローバリゼーションのなかの「和魂」

黒川 養老さんがちょうど新聞に書いていた、『日本では組織はすべて共同体になってしまって“個”がない』という話。私も「日本にはなぜ個がないのか」を考えていたのだけれど、日本はどこを切っ

ききて

養老 孟司 *Yoro Takeshi*

解剖学者・北里大学教授



ても三角形が出てくるのです。頭の中のシナプスも縦のつながりばかりで、横のシナプスはないんじゃないかと(笑)。

養老 共同体の問題は、日本では法律が完全に二重構造になっていることです。共同体のルールは“世間”のルールだから、われわれは実質的には世間のルールで生きている。だから弁護士1人当たりの人口が、外国に比べて極端に大きいのです。日本ではなぜ弁護士が少なくて間に合うのか。基本的に法律問題にならないからです。一般の人は法律を使って解決するということをやりたいから、法の実効性がない。それは、法律自体が日本の社会から立ち上がっていないからですね。日常われわれが使っているルールが、そのまま法律化していないのです。だから、二重構造になっている。

それは医療界では、脳死問題にあたる。人が死ぬということを法律はきちんと定義していないから。日本は死んだら

養老 孟司

1937年鎌倉生まれ。東京大学大学院博士課程修了。インターンを経て解剖学教室に入り、後に医学部教授。研究のかたわら、文学的領域でも活動の場を広げてきた。1995年に退官、1996年北里大学教授。著書は『人間科学』、『都市主義の限界』、『唯脳論』、『自分の頭と身体で考える』(甲野善紀氏との共著)など、多数。

人間ではないという考えですね。共同体から外れるということになる。つまり、死なないかぎり日本共同体を抜けられない。侍の世界での切腹はそれでしょう。共同体から自分は個人として抜きたいというときは「腹を切れ」と。いちおう、本人が腹を切れば万事チャラにしてやるという話なのです。現在はさすがに腹を切るというのはなくなったけれども、いまだに一般の人の中で残っているのは戒名と告別式の塩。いずれも、もはや共同体のメンバーではないということを示しているのです。したがって、死んだらすべての権利を失うということを法律家は知っている。ですから、おもしろいことに脳死臨調の少数意見のなかに、「死んだら人は物」という言葉が出てくるのです。それだけ聞けば、脳死を人の死と認め、臓器移植を可とする賛成派の意見だと思いますよね。反対派の人の言葉なのです。続きに「なぜなら死んだら人権がないから」と書いてある。法律家はそこを強調する。同じことを解剖の教師が言ったら袋叩きでしょうね、物として扱っているのかと。僕が現役のときに、実際に遺族が「物扱いをしているといけないから、解剖をみせてくれ」と言ってきたことがあるくらいです。では、日本人にとって人とはだれか。共同体のメンバーになっていないのは、まず胎児です。胎児は母親の一部、したがって、妊娠中絶が倫理問題になったことはない。

黒川 ああ、そういうことですか。

養老 僕はそう解釈します。アメリカで



は大変な倫理問題です。ところが日本で大もめた脳死問題は、アメリカでは全く問題ない。それは結局、人とは何かという定義に根本的に引っかかっている。死んだら人ではないということは、当時東大あたりでも献体の実現率は9割だった。遺言の効果は100%はないのです。

黒川 死んだ人の生前の意思より、遺族の意見が通る。

養老 そこを無理に押してやると、感情問題になります。生きている人の意見が優先するというのが、暗黙の憲法になっている。ただ、僕がこういうことを一所懸命に話しても、だれも聞いていないでしょうね。そういうことを考えない。考えないこと自体が、1つのやはり憲法なのです。それを「非成文憲法」と、僕は言っているのだけれど(笑)。その根本の精神は、意識化しないということです。うっかり物事を意識化すると、徹底的に議論しなければならなくなる。「これは無駄だよ」ということは、僕はある種の知恵だと思う。

黒川 西欧ではありえないね。

養老 西欧は「言葉にならないものは存在しない」という世界だから、根本的な違いがある。日本では、共同体を律している規則が暗黙だから、いくら議論しても“柳に風”。その日本共同体の暗黙のルールを「和魂洋才」と言うのです。和魂の部分にいま問題が引っかかっている。

黒川 私もそう思いますね。

養老 グローバリゼーションが、ちょうど和魂の反対、洋才になっているのです。

外圧で変革されてきた国、日本

黒川 問題は、今まではそれで済んでいたのだけれど、それで済んでいた枠組みが何かを考えなければいけない時期にきていることです。近代日本を明治以降とすると、まだ140年経っていない。暗黙知のような価値観が、そんなに変わる

はずがないのです。これまでほとんど外をみなくて済んでいた日本は、明治維新にしり、日本の大きな変革は日本自身がチョイスしていないまま来ています。歴史をみると、19世紀までの世界を支配していた1つの原動力は経済活動です。産業革命後、原料の確保と、加工して売る市場ということが国の力になっていった。欧米列強が領土拡大を謀り、アジアに進出してくる。そういうパラダイムのうちに中国ではアヘン戦争が起こり、香港を獲られて、そのうち朝鮮にも迫る。そういう状況下でのペリー来航だから、日本もついに鎖国を解かなければならなくなる。あくまでも外圧での開国です。

その後、日本は近代工業化をめざして日露戦争を奇跡的に勝利して突き進み、第2次世界大戦で敗北。アメリカの占領下になるのです。これがソ連でなかったのは日本にとって幸運で、これも日本自身のチョイスではありません。そして、20世紀後半に冷戦構造が始まった。日本はソ連と中国に、たまたま地理的に近い位置にある。朝鮮戦争ではアメリカの後方基地となり、あっという間に日本の経済が復興した。みんな日本のチョイスではないのです。だから今のリーダーたちが、冷戦構造、日米安保、護送船団というところで経済発展したのを自分たちの力だと思っているのは思い上がりです。

これまでサイエンスの開発には、原子爆弾にしても軍事目的で国が投資してきた。ライト兄弟が動力飛行に成功したのは1903年で、10年後には第1次世界大戦で飛行機が飛んでいる。その後、ベルリンの壁が落ちたのも、テレビやコンピュータの力が大きい。あれだけのインターネットのインフラストラクチャーがアメリカでできたのは、軍事目的で投資した技術を民間に活用するようになったからです。1994年にはネットスケープというのがベンチャーで出て、世界中がブラウザによってつながり、経済から何から全部グローバルになってきたのが、グ



ローバリゼーションの正体なのだけでも。

グローバリゼーションになると、日本も他の国との違いを感じざるをえないのです。さっきの司法、法律の問題もそうですけど、日本は三権分立していません。日本の法律は戦後になっても95%は役人が書いています。本来は立法府がつくる法律を、行政府が法律もつくり、執行し、都合が悪くなるとすぐに通達を出す。そんなことは法律にはないことです。それを訴える司法が、また、ないに等しい。行政訴訟の件数は、日本はドイツの1/20。なぜなら、訴訟を起こしても98%は負けるのだから。司法が行政の一部になっているのは、言ってみればグルですよ。経済も政治もグローバルに動いてくると、いろいろところで日本のおかしさが出てくる。そのときに、日本人は、なぜおかしいのかわからないわけです。

道路の制限速度は何のためか

養老 今の話を、具体的に医者の例でいうと、脳死がもめたときに、阪大の教授で脳死の患者さんに死亡診断書を書いた。それを、結局、警察が握りつぶしてしまった。日本がいかにも法治国家ではないかがわかるでしょう。死亡診断書を書くことができるのは、法律では医者に決まっている。それを法律上の手続きもなく変更できるというのは、行政のほうが優位なのです。たとえバラバラ殺人事件であっても、西欧型の制度であれば、検視官が来るまでは公式には死んでいることにはならない。けれど日本の場合、警察が来ればよいのです。暗黙のうちに警察イコールお上が決めることだと。

日本の法律をていねいにみると、おかしなことがほかにもあります。道路には全部、制限速度がついている。本来、道路を車が走るの原則自由、制限速度は危ないところに設けるもの。ところが、原則的に制限してあるのが日本の道路で

す。しかも内輪の速度に。普通に走ったら引っかかる速度ですよ。だいたいがお目こぼしというかたちで動いている。そういう法律をもっていれば、行政は有利なのです。いざ取り締まろうと思えば必ず引っかけられるから。東大の教授をしていた時、いちばんびっくりしたのは、実はそこなのです。国家公務員に関する執務基準があって、法律で書いてある。それに照らして自分の生活を考えたから、僕なんかクビにしようと思えばすぐできる。

黒川 養老さんは教授会に出ている本ばかり読んでいて、だんだん顰蹙を買って居にくくなったとか、言っていたけれど(笑)。

養老 それで出なくなったら「あなたの出席率は4割以下です」とかって、事務から手紙が来た(笑)。ともかく新聞によく出てくる不祥事や談話は、みんなふだんやっているわけです。けれども、「取り締まろう」と思った瞬間に取り締まれるようにつくってある行政のための法律ですから、法律が日常生活から遊離した次元にあるのです。だから弁護士は少ないし、行政訴訟なんてとんでもないとなる。「この制限速度はおかしいんじゃないか」と意義申し立てをした人はいないでしょう。あれだけスピード違反で捕まっている連中が(笑)。

黒川 同じようなことはマーケットでもいえて、海外の銀行がビジネスの好機ととらえて入ってくるようになると、現実は何んでも財務省が主導している。日本を民主主義の法治国家だと思っていたら、とんでもないと。そういうことが教育や医療でもいえるわけです。グローバリゼーションのなかで、いま、日本のチョイスは2つしかないのではないかと。GDPが、アメリカが1,100兆とすると、日本は500兆。次がドイツの250兆ですから、日本はまだまだ圧倒的な経済力を持っている。工業先進国、経済大国として世界とつきあわざるをえないのです。けれど、つきあうとなったら、今までの

暗黙知のようなやり方では通じない。それでもう1つ、「つきあわない」という方法もある(笑)。それは鎖国することです。鎖国しなせば、日本人全部がハッピーかもしれませんよ。

養老 私もどっちかなと思うけれど、本気で鎖国してみたらいいのです。どこが悪いのか、わからないのだから(笑)。

(次号に続く)

みんなのお医者さんは みんなで育てよう!

学生と先生と一緒に考え、議論しながら学んでいく。これが教育の基本だ!

書名: 医学生のお勉強
「クレイジー」な国ニッポンを理解しよう
内容: 黒川清氏によって2000年度行われた講座「現代文明論」の記録である。東海大学医学部の学士入学者と黒川清氏の対話形式で、下記の6セッションが展開される。

- Chapter1 安楽死
- Chapter2 避妊、中絶、ジェンダー・イシュー
- Chapter3 生殖医療
- Chapter4 生活習慣病
- Chapter5 医療事故
- Chapter6 医療経済

(芳賀書店発行 本体価格2,800円)

